

「ワタシたちの物語」

作
石黒秀和

プロローグ

闇。

忍び込むキーボードを打つ音。

浮かび上がる文字(あるいは音声)。

それは、ネットに流れる若手女優・加納瑞希への誹謗中傷。

女優の加納瑞希、マジウザい。

早く消えろ。

死ね。死ね。

もお出てるドラマ見たくない。

CM中断だって、ざまあ。

あの顔見てるところこっちも死にたくなる。

え？もお死んだんじゃないの？

腹黒女。

かまってちゃん。

悲劇のヒロイン気取り。

あんなんでなんで女優になれたかな。

ほんと早く消えて欲しい。

最低女と書いて加納瑞希。

ミズキ・・・ワタシ、名前変えたい。

なんで生まれてきたかね？この世に。

永遠に、消えろ。

グッバイ。

さようなら。さようなら。

音も文字も消え、再びの闇。

(以下は舞台上に再現したオンライン画面。その表現は自由に)

柏木瑠衣(35)が緊張して入室。

そこに恩師の岡田文子がいると思ったら・・・誰もいない。

戸惑い。

と、佐藤あゆみ(45)が入室。

瑠衣「！」

あゆみ「！ こんばんは」
瑠衣「こんばんは・・・」
あゆみ「あのお、こちら、岡田先生の・・・」
瑠衣「あ、はい、私も岡田先生に(誘われて)」
あゆみ「あ、そうなんです。まだ、いらっしやってない？」
瑠衣「みたいですわね」
あゆみ「そうですか・・・」
二人「・・・」

と、村上洋子(3)入室。

あゆみ、瑠衣「！」
洋子「・・・」
あゆみ「こんばんは」
洋子「あ、こんばんは・・・」
あゆみ「岡田先生の？」
洋子「あ、はい」
あゆみ「まだいらっしやってないみたいで」
洋子「あ、そうなんですか・・・」
あゆみ「(愛想笑い)」
一同「・・・」

ぎこちない間。

と、田口奈美(4)入室。

奈美「・・・」
あゆみ「こんばんは」

慌ててボリューム下げた感じで、

奈美「(小声で)こんばんは」
あゆみ「岡田先生の？」
奈美「あ、はい」
あゆみ「まだいらっしやってないようです」
奈美「あ、そうなんですか・・・」
あゆみ「みなさんも同じです」

一同、なんとなくお辞儀など。
ぎこちない間。

と、入ってくる沢村光枝(52)。

光枝「彼女はオンライン初めて。つながったことに興奮してあ！ こんばんは！」

あゆみ「こんばんは」

洋子「こんばんは」

奈美「(小声で)こんばんは」

光枝「あ、これ、聞こえていますよ！ あ、私、沢村光枝と申します！ 私、見えています？」

あゆみ「あ、見えていますよ！」

洋子「見えてますーす」

光枝「あー、良かった！ 私こういうの初めてで・・・できて、良かったあ・・・いやあねえ、息子も、誰も教えてくれないもんですから、ほんとにね、やんなっちゃう」

あゆみ「(苦笑)そうですかあ・・・」

光枝「あのお、岡田先生は？」

あゆみ「あ、まだいらっしゃってないんです」

光枝「あら、そうなんですか？ 皆さん、岡田先生の、お知り合い？」

この間に加納瑞希(53)が入る。しかしマイク、カメラはオフのまま、名前表記はM
い。

あゆみ「あ、私は、教え子です。豊ヶ丘女子高校の」

光枝「あ、じゃ、一緒。皆さんも？」

洋子「あ、はい」

奈美「はい」

瑠衣「(頷く)」

あゆみ「やっぱり、そうなんだ」

光枝「皆さん、同級生なんですね」

瑠衣「(ボソリ)同窓生」

光枝「はい？」

あゆみ、瑞希に気づき、

あゆみ「あ、あのお、えーと、M、さん？ マイクとカメラ、オフですよお、あのお、左下
の、カメラとマイクのマークに、斜めの、赤い線、入ってませんか？ それをクリックして、

解除してもらえれば」

・・・しかし、変わらず。

あゆみ「Mさーん、聞こえてますかあ？」

M・・・沈黙。

あゆみ「聞こえてないのかなあ・・・」

洋子「あのお、これ、先生がホストなんですよね？」

あゆみ「はい？」

洋子「これって、ホストがいなくても入れるんですよ」

あゆみ「あ、そうですね・・・」

奈美「それは大丈夫だと思います、最初に設定しておけば」

洋子「そうなんですネ・・・」

瑠衣「でも、これ、いたずらじゃないですよね？」

あゆみ「え？」

瑠衣「だって、先生・・・岡田先生、こういうこと、するかなあって・・・」

あゆみ「ああ・・・」

奈美「あ、それ、私もちょっと思いました」

洋子「私も、なんでかなあって、岡田先生が、急にこんなこと、なんでするのかなあって、思いました」

あゆみ「でも、皆さん教え子なんですよね？ 岡田、文子先生の」

頷く一同。

あゆみ「じゃ、いたずらではないような・・・」

光枝「サブライズかなあ？」

一同「？」

洋子「サブライズ？」

光枝「なにか、私たちをびっくりさせようと」

瑠衣「どんな？」

光枝「だから、なんか、ドッキリみたいな」

瑠衣「ドッキリ？（それはないわあみみたいな顔）」

奈美「もしかして、忘れてるんじゃないですか？

招待したこと

光枝「それはないでしょう」

奈美「でも、先生も、もおお歳でしょうし……」

光枝「あー」

一同「……(ちょっと、不安になったりする)」

あゆみ「あー、多分、なんか、事情があつて遅くなってるだけです。もう少し待ったら、きつと……あ、じゃ、どうでしょう？　せっかくだから、待ってる間、お互いに自己紹介など」

光枝「あー、いいですねー！」

瑠衣「私は……(出来れば退出したい)」

あゆみ「じゃ、私からいきますね。えー、私は、佐藤あゆみと申します。歳は……ま、言っちゃっていいかな？　55です。皆さん……私よりお若そうですね。岡田先生には、高3の時に担任をやっていたきました。生徒会長もやらせていただいて、部活は、合唱部でした。一応部長をしてました。あ、この中で、合唱部だった方は……いないですか、残念……えー、今は、社員をしています。ロックダウンになってから、ずっと在宅で、仕事してます。未婚です。えーと、とりあえずそれくらいかな？　じゃあ、どうしよう？　次は……」

光枝「あ、じゃ、私、いいかしら？」

あゆみ「あ、どうぞ」

光枝「えー、沢村光枝と申します。佐藤さん、56歳？　多分、私が、この中で一番上だわ。一応専業主婦してますけど、スーパーで、週3で、パートもしてます。ロックダウンでもスーパーは営業してるんで、マスクとフェイスガードで、今日も仕事してきました。主人からは危ないからやめとけって言われてるんですけどね……でもね、家には……ねえ、姑もいるわけだし、毎日家にいたら……ねえ、あ、(隣の部屋に姑がいるというアクション)。(ちよつとだけ小声で)子供は、二人います。28歳の娘と19歳の息子。ま、子育てもほぼほぼ終わって、いよいよ第二の人生って感じなんですけど……実は、今はまってるものがあります。何だと思う？　フフ、(お・も・て・な・しのように)は・ん・りゅ・う・ど・ら・ま。知ってます？　今一推しなのは、愛の、ふ・じ(と突然フリーズする)」

あゆみ「あ、あれ？　沢村さん？　とまっていますよ！　沢村さん！……沢村さーん？……あれ？　ダメかなあ？　沢村さーん！……ダメだ……あ……じゃあ……先に、村上、洋子さん？　お願いします」

洋子「あ、はい。村上です。高校で教師をしています」

あゆみ「教師？」

洋子「岡田先生には、高2の時に担任をしてもらいました。今日はよろしくお願いします」

あゆみ「あ、お願いします」

光枝「(フリーズとけて)もお、胸がドキドキしちゃってねえ！　心筋梗塞じゃないわよ」

一同「……」

あゆみ「あ、沢村さん、今とまってきましたよ」

光枝「え？　あ、そうなの？　なんか変って思ってたのよねえ……今は大丈夫？　あ、じゃ、

自己紹介、もう一回やる？」

あゆみ「あ、とりあえず、大丈夫です。次行ってますので。じゃ、次、田口、奈美さん？」

奈美「(小声で)あ、はい。田口奈美です。よろしく願います」

光枝「え？ なに？ よく聞こえないんだけど！」

奈美「(小声で)田口奈美です、よろしく願います」

光枝「え？」

あゆみ「あ、田口奈美さんですね、よろしく願います。じゃ、次、柏木、瑠衣さん？」

瑠衣「柏木です。よろしく願います」

一同「——」

あゆみ「(なにか続くと思ったのに続かないので)・・・あ、はい、よろしく願います。

えーと、次は・・・Mさん？ あのお、聞こえますか？ Mさん自己紹介、お願いできま

すかあ？ アレ？ M・・・じゃないのかな？ あ、画面に、Mってある、あなた！・・・

やっぱ聞こえないのかな？」

沈黙のM。

一同「・・・」

あゆみ「・・・あー、じゃ、また、先生がいらっしやったら、ね・・・それにしても、先生、

ほんと、来ませんね」

光枝「そうねえ」

洋子「いくらなんでも遅くないですか？」

光枝「遅いわねえ」

洋子「先生、そういうとこ、しっかりしてるはずなのに・・・」

光枝「なにかトラブルかな？」

瑠衣「やっぱりいたずらじゃないですか？」

あゆみ「あ、でもね」

瑠衣「大体、私、疑問に思ってたんです」

あゆみ「え？」

光枝「なにを？」

瑠衣「なんで、私なのかなあって」

あゆみ「？」

瑠衣「なんで、私が呼ばれたのかなって・・・」

一同。

瑠衣「今さら、先生、私に何の用が・・・」

洋子「あ、それ、私も思っていました。なんで私が呼ばれたんだろうって……」
奈美「私も、実は卒業以来、先生に一度も会ってなくて……なのになんで私呼ばれたんだろうってちょっと不思議に思っていました。大体、なんで先生、私の連絡先知ってたんだろう……」

光枝「あ、それは、私も疑問に思った」

洋子「言われてみれば、私も、先生とは年賀状のやりとりくらいかな」

あゆみ「あ、年賀状は私もやりとりしてます」

光枝「じゃ、それから？」

瑠衣「私は年賀状出してません」

奈美「私です」

あゆみ「私も、メールアドレスは、書いてないような……」

光枝「……じゃ、なんでだろう？」

一同「……」

あゆみ「同窓会名簿？」

光枝「同級会名簿？」

あゆみ「あ、ほら、一昨年くらいに、60周年の記念誌つくるのに、確か卒業生の住所とかメールアドレスとか……」

洋子「あー、あったあった。私寄付しました」

瑠衣「あ……」

光枝「へえ、そんなのあったんだ……」

洋子「間違いない！ それだ！」

奈美「それで、先生、私たちに招待を？」

瑠衣「でも、なんで私たちだったんですか？」

あゆみ「……」

瑠衣「しかもこんなバラバラな……その理由が、やっぱり私、分からない……」

一同「……」

光枝「ま、あんまり、意味はないんじゃない？ たまたま目についたのがさ……あるいは、本当はもつとたくさん声かけたけどこんなけしこく集まんなかったとか」

あゆみ「あー、まあ、そんなとこだわね、きつと」

光枝「たまたまメールアドレスの分かった教え子？」

あゆみ「たまたま暇だった人たち」

光枝「ハハハ、当たってる」

瑠衣「私は暇じゃありません」

光枝「あゆみ……」

光枝「あ、そ……」

洋子「そういえば、今流行ってるんですよね、オンライン同窓会。ウチの先生も何人かやっ

てます」

あゆみ「そうなの？」

光枝「村上さん、先生だったの？」

洋子「あ、はい」

光枝「学校も今大変なんですよ？」

洋子「新入生なんてまだ一度も学校来てないんです。せっかく受かったのに……」

あゆみ「かわいそうに……」

光枝「うちの息子も、専門学校、まだ一度も行っていない。授業料は払ったのに……」

あゆみ「つたく、いつになったら解除になるのかしらね？ このロックダウン。もお一ヶ月

以上も……」

光枝「ほんとにねえ……なんて世の中になっちゃったんだか……」

あゆみ「ねえ」

一同「……」

奈美「でも、先生、ほんとどうしたんですかね？」

光枝「来ないわねえ」

洋子「やっぱり日にち間違えたとか」

奈美「メール、送ってみましょうか」

あゆみ「あ、じゃあ、30分まで待ちましょうよ。それで来なかったら、またということだ」

奈美「あ、じゃ一応送ってみますね。30分まで待ちますって」

あゆみ「お願いします」

光枝「それじゃ、それまで、なに話そっか？ あ、じゃあさ、今、何してるか、とか？ ロ

ックダウン中の過ごし方？ ちなみに私は、マスクづくりと……さっきも言ったんだけど

ね、韓流ドラマ」

あゆみ「韓流ドラマ？」

光枝「そうなの、これがね、はまるの。まさに沼、底なし沼。観出したらもお抜けられない

の！」

洋子「へえ」

光枝「今観てるドラマもね、とにかく、もお、すぐ泣くの」

あゆみ「え？」

洋子「なにが？」

光枝「主人公が！ イケメンの胸板厚い主人公が、すぐね、泣くの。こう、切ない顔で、ぽ

ろぼろって」

洋子「はあ……」

光枝「それが、もお、胸キュンなの！」

あゆみ「そうなの？」

洋子「泣くのが？」

光枝「そうなの！ 泣くのがいいの！ もお抱きしめたくなっちゃうの！ 会いたいのに会えない、その切なさ、もお堪んなくて・・・（思い出し）あゝ（韓国語で愛してるとかなんとか言って・・・またフリーズ）」
一同「・・・」

あゆみ「あれ？ またとまっちゃった・・・沢村さーん！・・・ダメね・・・あ、じゃ、ほか、誰か・・・あ、村上さん」

洋子「え？」

あゆみ「なにしてるの？ 家で」

洋子「あー、私は・・・一応、学校は在宅で、来週からリモート授業が始まるので、そのための準備を色々・・・あと、本当は、今月結婚式だったんですけど」

あゆみ「え、そうなの！」

奈美「おめでとうございます」

光枝「（フリーズとけて）おめでとう！」

洋子「（苦笑し）ありがとうございます。でも、延期っていうか、中止になっちゃって」

あゆみ「ロックダウンで？」

洋子「はい」

光枝「まあ、お気の毒に・・・」

洋子「それで、結構、色々大変で・・・」

あゆみ「まさかねえ、こんなことになるとは、思わないもんねえ・・・」

光枝「御主人とは？ 今は？」

洋子「まだ一緒に暮らしてなかったから・・・」

光枝「別々なの？」

洋子「はい」

光枝「じゃ、会えないの？」

洋子「はい。実は、入籍もまだで・・・」

光枝「まあ！ それは切ないわね！ 会いたいのに会えない、愛し合ってるのに、二人は、会えない！ これはまさに、韓流ドラマの世界だわ！」

洋子「はあ・・・」

光枝「でも大丈夫、いつか必ず会えるから。愛する気持ちが強ければ、二人は必ず（再び韓国語。そして、消える）」

あゆみ「あら、消えちゃった」

洋子「・・・」

奈美「なんか、大変ですね」

洋子「まあね。でも、今はそういう人たくさんいるから・・・」

奈美「頑張ってください」

洋子「（苦笑）ハイ」

あゆみ「ね、柏木さんは？ 毎日なにしてるの？」
瑠衣「私は・・・介護の仕事してるので、毎日仕事です」
あゆみ「介護、まあ、大変ね」
瑠衣「はい。でも、今はデイサービスが中止で、入所者の方は、ご家族との面会もできないので・・・」
光枝「(復帰し)ウチの姑もね、デイサービス行けなくて毎日家にいる。歩かないから、なんだか足腰弱ってきてて・・・たく、どっちが健康に悪いんだか・・・」
瑠衣「・・・」
あゆみ「(苦笑し)田口さんは？」
奈美「あ、私は・・・専業主婦なので、ずっと家にいます。主人も家にいるので・・・」
光枝「ま、それは大変」
奈美「あ、すみません、それで、あんまり大きな声出せなくて」
あゆみ「・・・(ちょっと察する)」
光枝「大丈夫よ、ちゃんと聞こえてるから」
奈美「すみません・・・」
あゆみ「田口さん、あなた・・・」
奈美「はい？」
あゆみ「あ、いや、大丈夫？」
奈美「・・・」
あゆみ「(何か言おうとして)」
光枝「佐藤さんは？」
あゆみ「え？」
光枝「何してるの？」
あゆみ「あ、あー、私は・・・仕事は在宅で、最近、同僚や友達とオンライン飲み会とか、やっています」
光枝「まあ、オンライン飲み会？」
洋子「私も先週はじめてやりました。友達と。案外、盛り上がりますよね」
あゆみ「独身なんで、気楽に過ごしています」
光枝「もしかして、バツー？」
あゆみ「あ、いえ、残念ながら一度も・・・」
光枝「あら、ごめんなさい」
あゆみ「(苦笑し)いいんです。結婚は、もおないかなあ、て」
奈美「(心から)うらやましいです・・・」
あゆみ「あ、でも、一人暮らしでは、ないんですよ」
光枝「え？ 同棲してるの!？」
あゆみ「まあ、ある意味そうですね、(部屋を見渡し)ゆたか！ あれ、どこ行ったのかな？」

ゆたか！」

洋子「もしかして、ワンちゃん？」

あゆみ「あ、はい」

光枝「え？ 犬？ なーんだあ、ドキドキしちゃったじゃない・・・」

あゆみ「（苦笑し）なんか、おしまいですよね、おひとり様で犬飼うようになったら」

洋子「そんなことないですよ」

奈美「はい、いいと思います」

あゆみ「ありがとうございます」

洋子「竹之内？」

あゆみ「え？」

洋子「ゆたか」

あゆみ「あー・・・水谷」

奈美「そっちなんだ」

あゆみ「（はにかみ）私の、相棒」

洋子「なるほど・・・」

光枝「ちよつとお、Mさーん、聞こえていますかあー」

M「・・・」

光枝「やっぱいないのかな？」

洋子「それにしても、来ませんね、先生」

あゆみ「そうねえ」

光枝「もうすぐ半ね」

奈美「返信もきません」

あゆみ「もお諦めますか？」

光枝「そうねえ・・・」

瑠衣「あ、でも、もうちよつと！ もうちよつとだけ、待ちませんか？ せっかく集まったんだし」

光枝「（瑠衣が言ったことが意外で）・・・そお？」

瑠衣「なんだか、先生、もうすぐ来る気がして・・・」

あゆみ「・・・」

奈美「あ、私も、なんだかそんな気が、します・・・」

一同「・・・」

光枝「あー、じゃあ、もうちよつと、続けますか？ 同級会」

瑠衣「（ぼそつと）同窓会」

光枝「ん？」

瑠衣「あ、いや、さっきから気になってたんですけど、同級会じゃなくて、同窓会」

光枝「・・・違うの？」

瑠衣「違います」

光枝「どこが？」

瑠衣「歳が」

光枝「歳？」

瑠衣「同級会は、同じクラスの人たちで、同窓会は、同じ学校の人たち、です」

光枝「そうなの？」

洋子「あ、そうかもしれないですね」

光枝「・・・ま、どっちでもいいんじゃない？」

瑠衣「よくないです」

光枝「いいでしょ、大体あなたね」と音声悪くなり、また消える」

洋子「消えた」

瑠衣「・・・」

あゆみ「・・・あ、じゃ、岡田先生との思い出、なにかない？ 同じ教え子として」

洋子「あのお、先生って、今、お幾つなんですか？」

あゆみ「え？ あー・・・(考え)70、くらい？」

奈美「私が高校生の時は、多分、50、もお超えてたと思います」

あゆみ「確か、30過ぎてから教師目指したって言ってたような気が・・・」

光枝「(復帰)あのね、70は越してるわよ！ だって私たちが先生が担任持ったはじめてのクラスなんだから！ 確か、あの時、すでに40近かったような・・・」

洋子「いずれにしても、遅くから教師になったんですよ。どうしてそんな歳から・・・」

一同「(なんでだろう?)」

あゆみ「確か、独身だったわよね？ 先生」

光枝「え？ そうなの？」

あゆみ「確か、そうだったような・・・」

洋子「そうです。私、何度か家に行ったことあるので」

光枝「先生の？」

洋子「はい。高2の時に、私、猫を拾って、その猫を、先生がご自宅で飼ってくれたんです。で、ご自宅に何度か・・・。平屋の、小さな、素敵なおうちでした。そこにご家族はいなかったと思います。一人暮らしだからって言ってたような・・・あの猫、なんて名前だったかな？」

瑠衣「クロじゃないですか？」

洋子「あ、そう！ クロ！・・・なんで知ってるの？」

瑠衣「あ、私も、何度かご自宅お邪魔したので・・・」

洋子「そうなんだ・・・あの猫、確か足が悪くて・・・まだ生きてるのかな？」

瑠衣「・・・」

あゆみ「教師になったのは先生の影響？」

洋子「え？ あ……はい。実はウチ、色々あって……高校時代、先生に、本当にお世話になって……」

一同。

洋子「先生がいなかったら、ほんと、今頃、私どうなってたか……なのに……ずっと忘れてた。こうして教師にもなれたのに、私、お礼も言えてなくて……あ（あ、それで先生は呼んでくれたのかと。今の私を心配して！）」

奈美「私も、先生にはとつてもお世話になりました。先生がいなかったら、私は、きっと卒業できてなかったと思います。私……あ（なにかを思い出す）」

光枝「そうね、私も、先生がいなかったら……あの時、先生だけが、信じてくれたから……だから……あ（思い出す）」

あゆみ「……なんか、皆さん、色々、あったのかな？ 確かにね、いい先生だったわよね、岡田先生。いつもおだやかで、でも時々厳しくて、そう、まるで、もう一人のお母さんのよう……」

光枝「あ、私、高校時代先生にそう言ったら先生ものすごく喜んでくれて、まるでお母さんみたいって言ったら、ほんとうに……」

奈美「あ、私も、そういうことありました。なんだか私、本当にお母さんみたいに思ってた……」

洋子「私は、あんな先生になりたくて……」

あゆみ「やだ、話聞いてたら、なんだか色々思い出してきた……」

奈美「高校時代なんて、ついこの間のことだと思ってたのに……」

光枝「あー、なんだか早く会いたくなってきちゃったなあ！ もお早く来てえ！ 先生！」

洋子「ほんとどうしちゃったのかな？」

あゆみ「ね」

と、

瑠衣「そうかしら」

一同「？」

あゆみ「え？」

瑠衣「そんないい人だったかな」

一同「——」

瑠衣「私は……恨んでる」

一同「……」

瑠衣「先生の事、恨んでる」

一同。

瑠衣「先生は、私の人生をめちゃくちゃにした」

一同。

瑠衣「そのこと言いたくて」

一同。

瑠衣「私は今日ここに来たんです」

一同。

あゆみ「どういうこと？」

瑠衣「私妊娠したんです」

光枝「え？」

瑠衣「高3の時に」

一同。

洋子「それは・・・」

瑠衣「相手は、その時付き合ってた大学生の彼氏。もちろんまわりはみんな反対して、親も、先生も、その歳で子育ては無理だって、絶対、後悔するからって・・・でも、先生は、岡田先生だけは、あなたが決めなさいって。あなたが決めた答えなら、私は全力で応援するからって。だから、私、みんなの反対押し切って、産むこと決めたのに・・・」

一同。

瑠衣「間違いだった。私の、判断は・・・」

一同。

瑠衣「私は本当は大学にも行きたかった。夢もあった。私には、将来の夢も、なのに・・・」

一同。

瑠衣「娘を産んで、彼と結婚して、最初は、なんとかやってたけど、でも、結局、彼は女つくって逃げちゃって・・・私は、娘を一人で育てて、仕事も転々として、30過ぎてようやく今の仕事見つけて・・・必死で、とにかく必死であの子のこと育てたのに・・・なのに、今は、口もきいてくれなくて・・・」

一同「・・・」

瑠衣「私今好きな人がいるんです。同じ職場の・・・。彼と・・・結婚して、人生をもう一度やり直したい。彼と、人生、もう一度・・・なのに・・・あの子がいるから・・・あの子が・・・」

一同「・・・」

瑠衣「あの子さえ産んでなければ、私は幸せになれたんです！ あの子さえ、いなければ、

私は・・・」

一同「・・・」

瑠衣「だから、全部、先生のせいなんです。先生が、あの時、応援してくれなければ・・・

先生が、あの時・・・だから・・・私は、先生を恨んでるんです・・・」

一同「・・・」

間。

あゆみ「私もね、高校時代から、負けず嫌いだね。生徒会長、合唱部の部長・・・女子高だったからね、女でもやれるって、その時自信つけて。就職してからも、男の人には負けないぞって、結婚もせずに、仕事一筋で・・・。それでいって、思ってたの。私は、そういう人生でいいって、ずっとね、なのにね・・・。先週、オンラインの女子会があってね、そこで、いつものように同級生の、子どもやご主人への愚痴聞かされながら、私ね、なんだかうらやましくなっちゃったの・・・以前はあんなに馬鹿にしたのにね、なんだか、すつごく、うらやましくなっちゃって・・・なんだらうね？ 私にはもうそういう話はできないんだなあって思ったら、子どもは、できないんだなあって思ったら、なんだか、私ね・・・」

一同。

あゆみ「生理が、こないの、去年の夏から。ロックダウンの前にね、病院に行ったら、先生に、それは更年期ですって、あっさり・・・。そうしたら、子どもなんてとくに諦めてたはずなのに、なんだかそういわれた途端、泣けてきちゃってね・・・あーあ、私、なんのために、ここまで働いてきたのかなって、なんのために、生まれてきたのかなって、私の、人生、なんだったのかなって・・・(涙で)あれ？ ごめんなさい・・・」

光枝「私もね、夫とは、見合い結婚だったんだけどね、顔は、まったく好みじゃなかったんだけど、まあ、悪い人じゃなかったし、舅姑も、まあ、やっぱり悪い人じゃなくて、それで、すぐに娘が生まれて、息子も生まれて、子育てして、気づけば50過ぎてて、子育てもほぼ終わって・・・平凡なんだけどね、今は幸せなんだと思う。平凡なんだけど、それが一番、幸せ・・・そう分かってはいるんだけどね・・・」

一同。

光枝「高校時代、好きな人がいたのよ。他の高校の人だったんだけど、3年間、ずっと。朝、駅で顔見られただけで、その日が幸せになってね・・・会えなかった時は、次の日が待ち遠しくて、だから土日はちょっと寂しくて・・・毎日、彼のことばかり考えて・・・でも、そんな時間が、愛おしくて・・・。最近ね、そんなあの頃の気持ちを、やたら思い出しちゃうのよ。何十年も前のあの頃の気持ちを・・・笑っちゃうでしょ？　こんないい歳したおばさんが、いまさら・・・きもいよね？　でもね・・・私、もう一度、恋がしたいのよ。あの頃みたいな、ドキドキした、恋を・・・もう一度ね、もう一度だけしたいのよ」

一同「・・・」

洋子「私は迷ってます」

一同「？」

洋子「結婚。式が中止になっちゃって・・・でも、キャンセル料が全額発生しちゃって、彼が、今一人で交渉してくれてるんですけど、なんだか、やっぱり難しいみたいで・・・このままじゃ、もお式はあげられないかなって・・・ま、それはそれでいいんですけど。私、両親とは、もともとうまくいってなくて、今回も、本当はやりたくないなって、心のどこかで思ってから・・・だから、そのせいで、本当にダメになっちゃったのかなって。こんな気持ちだから、彼との結婚、ダメになっちゃったのかなって・・・私、彼と、幸せになれるのかなって・・・うん、幸せにしてあげられるのかなって、そう思ったら、どんどんどんどん迷っちゃって・・・彼とは、最近、連絡とってなくて・・・私は、彼にはふさわしくないんじゃないかって・・・私は、ほんとうは彼とは結婚したらいけないんじゃないかって、幸せな家庭は築けないんじゃないかって、そんなふうに思ってたら、なんだかどんどんどんどん・・・迷っちゃって・・・」

一同。

洋子「ちょっと、疲れてます」

一同「・・・」

奈美「私は、万引きで捕まりました」

一同「！」

光枝「え？」

奈美「高校時代、両親の仲が、すつごく悪くて・・・私は、父のことが大好きだったんですけど、結局、私が万引きで捕まった後、父は家を出て行ってしまっただけで・・・高校卒業して、私はすぐ働き始めて、そこで、主人と出会って・・・取引先の、営業の人で、23で結婚して、主人のご両親とってもいい人で、お金にも不自由しない、幸せな結婚生活で・・・でも、子どもができなかったんです。ふたりともとっても欲しかったのに・・・。検査したら、主人に問題があるって言われて・・・でも、私はそれでもいいって。子供がいなくても、二人でずっと暮らせるなら、それでいいって・・・でも・・・主人は、それから私とほとんど口をきかなくなっただけで・・・家にも、ほとんど帰ってこなくなっただけで・・・ロックダウンになって、今は主人も毎日家にいるんですけど・・・最近、暴力をふるうようになって・・・それで、私、昨日、また万引きをしてしまったんです・・・先生に、誓ったのに・・・あの時、もう二度としないって、誓ったのに・・・なのに・・・(涙)あ、やだ、私こんなこと、見ず知らずの人たちに・・・でも・・・ごめんなさい・・・」

一同「・・・」

あゆみ「どうしてだろうね。人生、うまくいかないことばかり。あの頃は、そんなこと思っでもいなかったのにね。でも・・・柏木さん、あなたも、本当は分かっているのよね？ 先生は、それでもまた、聞いてくれる、私たちの話を、聞いてくれる」

瑠衣「・・・」

あゆみ「だから、あなたは、ここに来た」

瑠衣「・・・」

あゆみ「多分、私たちも・・・」

一同「・・・」

間。

と、

光枝「実はね、私、豊ヶ丘の卒業生じゃないの」

一同「！」

あゆみ「え？」

光枝「退学したのよ、3年生の途中で」

あゆみ「・・・そうだったんですか・・・」

光枝「クラスで盗難事件があったね、その犯人に、されちゃって・・・(首振り)本当に私じゃなかったのよ。でもね・・・結局、誰も信じてくれなくて・・・ホラ、私こんな性格だから、多分、誰かに、うざいとかって思われたのかな・・・子どもたちにもよく言われるの」

一同「・・・」

光枝「で、結局、警察に連れていかれてね、私の鞆に盗まれたって言う財布が入ってたから、

相手の親と、そこで示談みたいになっちゃって・・・迎えにきた私の親は相手の親にただただ謝るだけで・・・もお、誰も信じてくれなくて・・・私もね、だんだん、もうどうでもいいやっとなっちゃって、やってもいないのに、やったって最後は言っちゃって、それで・・・結局退学」

一同「・・・」

光枝「それでもね、最後まで、ただ一人、信じてくれたのが岡田先生。先生だけは・・・」
一同「・・・」

光枝「卒業式の日ね、先生が、夕方、ウチに来てくれたの、突然。そしてね、手作りの卒業証書を渡してくれて・・・ごめんねって、守ってあげられなくて、ごめんねって・・・」
一同「・・・」

光枝「夕日がきれいだった・・・あの日、先生と見た夕日が、とつても・・・私はね、あの日の夕日の美しさを、多分一生忘れない・・・一生・・・」

一同「・・・」

奈美「私も、万引きして、お店に先生が迎えに来てくれた帰り道、二人で星を見ました。先生、ただ黙って、私のそばにいてくれて・・・私、忘れてた・・・」

あゆみ「先生は、そういう人だった。名も知らぬ道端の花、流れる雲、小さな虫たち、そんな、身近な世界の美しさを、そっと寄り添って教えてくれる人だった・・・」

洋子「なんで今まで忘れてたんだろう、なんで、あんな大事なこと・・・」

光枝「生きるのに、精一杯で」

あゆみ「今を生きるのに、必死で」

洋子「でも、思い出した」

奈美「私は、一人じゃなかった・・・」

一同「・・・」

あゆみ「ね、柏木さんの娘さんは、今、いくつ？」

瑠衣「・・・17です」

あゆみ「17歳かぁ・・・私たちが、岡田先生と出会った頃の歳なのね」

瑠衣「！・・・」

あゆみ「ねえ、田口さんも、先生来たら、ご主人の事、全部吐き出しちゃいなさいよ。大声で。いいのよ、わざと聞こえるように。ご主人に、あなたの気持ち、分かるように、大声で、吐き出しちゃいなさい！」

奈美「！・・・」

あゆみ「私も、先生に聞いてもらうの、私の、これまでの人生。うまくいったことも、いかなかったことも」

光枝「なら、私も、恋がしたいって言っちゃおうかな。あの頃みたいな恋がしたいよおって、先生に！ それから、ありがとうって。あの時言えなかった、ありがとうって！」

洋子「私も、彼に会いたいって！ 早く会いたいって！ 結婚したいって！ それから、先

生みたいな先生に、なりますって!」

あゆみ「あー、早く来ないかなあ、先生、ったくなにしているのかなあ?」

一同「・・・」

と、どこか遠くで、猫の声がきこえたような。

一同「?」

と、現れる天野良江(50)。

光枝「あ」

画面には確かに岡田文子の名。しかし、そこに映っている顔は明らかに違う。

洋子「先生?」

良江「良かった・・・こんばんは」

一同「こんばんは」

あゆみ「あのお、岡田、先生、じゃないですよね?」

良江「はい、すみません、天野と申します」

一同「・・・」

良江「岡田文子さんの教え子の皆さんですよね?」

あゆみ「はい」

光枝「あの、先生は?」

良江「お亡くなりになりました」

一同「!?!」

あゆみ「え?」

良江「今朝、私たちの病院で」

一同「(絶句)」

良江「あ、申し遅れました。私、豊丘病院のホスピス病棟で師長をしております天野良江と申します。岡田文子さんは、半年ほど前から私どもの病院に入院しております、今朝方、残念ながらお亡くなりになりました」

一同「!・・・」

あゆみ「あのお、それで・・・」

良江「岡田さん、今日、皆さんにお会いできること楽しみにしていただきます。最期に、皆さんにお会いできること・・・実は、私、今日の為に色々お手伝いさせてもらったのですから、もしかしたらって・・・これは、岡田さんのパソコンからです」

光枝「亡くなられたって、先生、ご病気だったんですか？」

良江「すみません、詳しくは申し上げられないんですけど、岡田さんはご自分の余命はご存じで、でも、前向きに頑張っていたらっしゃいました。ただ、まさか、今日お亡くなりになるとは……」

一同「……」

良江「先月でしたか、急に、最後の授業がやりたいっておっしゃったんです。どうしても、気になる生徒たちがいて、その子たちの為に、最後の授業がやりたいって」

一同「……」

良江「そこで伝えたいことがあるって言ってました」

光枝「伝えたい事？」

良江「岡田さんがなにを皆さんに伝えたかったのか、正直私にも分からないんですが、皆さんは、岡田さんがご主人とお子さんを亡くされてること、ご存じでしたか？」

奈美「え？」

洋子「先生、お子さんがいらっしゃったんですか？」

あゆみ「全然、知らなかったです」

頷く一同。

良江「やっぱり。誰にも言ってなかったんですね。岡田さんは、教師になる前、二十代の時にご結婚されて、娘さんが一人いたんですけど、娘さんが小学校1年生の時に、交通事故で、ご主人と一緒に亡くされて……」

一同「!……」

良江「岡田さんは、その時死ぬつもりだったって言ってました。自分も、二人の後を追うつもりだったって。でも……二人を忘れないために……娘さんにしてあげられなかったことをしてあげるために、教師になったって。そうして皆さんと出会って、それで、救われたんだって」

一同「……」

良江「つらいつらい人生だったけど、最後は、あー、いい人生だったって、思えたのは、皆さんに出会えたからだって」

一同「……」

良江「そんなことおっしゃってました」

一同「……」

良江「今日は、多分、それを、皆さんに、伝えたかったんじゃないかと……」

一同「……」

良江「ごめんなさい。私、ちょっと差し出がましいかなって思ったんですけど、岡田さんが皆さんに会いたがったこと、今日のこの日を、とっっても楽しみにしてたこと、どうしても

皆さんに伝えたくて……」

一同「……」

良江「でも、岡田さん、きっと喜んでいます。今日、皆さんが、ここに来てくれて」

奈美「あの、先生は……」

と、画面に出てくる瑞希。

あゆみ「あ、あなた……」

洋子「加納瑞希？」

光枝「あー、あの、女優の？」

奈美「そういえば、うちの卒業生……」

あゆみ「でも、あなた今……大丈夫なの？」

瑞希「私、死ぬつもりだったんです」

一同「！……」

光枝「ちょ、ちょっと、あなた！」

瑞希「皆さんも、ご存知ですよ、私の事……ネットで叩かれて……なにもかも、ダメになっちゃって……死ぬ、死ねって……だったら、もういいやって、もう、どうなってもいいやって、死ぬ、死ねって言うなら、本当に死んでやろうって、そうしたら、少しは後悔してくれるのかなって……それで、遺書まで書いて、覚悟決めて、そうしたら、先生からメールが来たんです。今回の、この……。一週間後なんて、長いなって思いました。一週間も、待つなんて。でも、なんでか、最期に、もう一回先生の声が聞きたくて……高校時代、私の事、唯一応援してくれた先生の、声、もう一度……。そうしたら、なんだかちょっと今日が楽しみになってきちゃって、遺書まで書いたことちょっと忘れちゃったりして……。それで、今日ここに来たんです。でも、そうしたら、先生はいなくて、代わりに、皆さんがいて、あーそうか、私だけじゃなかったんだって。先生は、私とだけ話しかけたんじゃないなかったんだって……。考えてみれば当たり前ですよ、でも……。なんだか、それがちょっと寂しくて……。それで、皆さんの話だけ聞いてました。そうしたら、私も思い出しちゃって……。先生のこと、先生に、励ましてもらったこと、先生と、見た、朝焼けのこと……」

一同「……」

瑞希「先生は、苦しまずに、いけましたか？」

良江「はい、とっもおおだやかに」

瑞希「良かった……」

良江「きっと安心したのね、もう、大丈夫だって。あなたは、もお大丈夫？」

瑞希「(頷き)はい」

あゆみ「きっと、今頃ご主人と娘さんに……」

光枝「会えてるよ、絶対」

瑠衣「涙」

奈美「あの、今日亡くなったのなら、お通夜とかは」

良江「こんなご時世ですし、岡田さんのご意向もあって・・・ごめんなさい、詳しくはお話できないんですけど」

瑠衣「一人じゃないんですよね、先生は」

良江「それは大丈夫。一人じゃありません」

一同「・・・」

瑠衣「会いたい・・・先生に、会って、ありがとうございましたって、言いたい・・・（あふれる涙）」

良江「大丈夫、思いは、通じてると思いますよ。それより、忘れないでいてくださいね。岡田さんのこと。そういう、女性がいたこと。（呼び出しが鳴る）あ、ごめんなさい、私、もう行かなくちゃ」

あゆみ「あ、あの、ありがとうございました、教えてくれて」

光枝「ありがとうございます」

一同「ありがとうございました」

良江「こちらこそ。それじゃ」

と消える良江。

長い間。

光枝「ね、校歌歌わない」

洋子「え？」

光枝「豊ヶ丘の校歌」

奈美「あ、でも、私覚えてない・・・」

洋子「私も・・・」

光枝「あ、そういえば私も・・・」

一同「・・・」

と、突然歌い出すあゆみ。

一同「！」

あゆみ「私、生徒会長。さらに合唱部部長」

光枝「あ」

あゆみ「大丈夫、歌ってればきっと思い出すから」

と再び歌い始めるあゆみ。

と、次第に思い出していく一同。

やがて、それは大きな合唱に。

それは、亡き恩師、文子への別れの歌。

葬送の歌。

同時に、文子から彼女たちへの、最期のエールともなる。

(高校時代の彼女たちの姿が流れてもいい)。

——歌い終わる一同。

洋子「聞こえたかな？」

光枝「聞こえたよ、きつと」

あゆみ「じゃ、私たちも、そろそろお別れかな」

瑠衣「あの、また、会えますか？」

あゆみ「もちろん！」

光枝「いつでも相談にのるわよ！ 同級生じゃない」

瑠衣「同窓生！」

光枝「(笑)」

あゆみ「加納さん、あなたも、一人じゃないからね」

瑞希「はい」

光枝「田口さん、あなたもね」

奈美「はい」

あゆみ「村上さん、いい先生になってね」

洋子「はい」

あゆみ「そして、お幸せに」

洋子「はい」

あゆみ「ね、沢村さん、私も、今度観よつかしら、韓流ドラマ。私もね、実は、今、すっごく恋したい気分なの」

光枝「あ、ぜひ！ なんなら一緒に！・・・て、ロックダウン中か・・・あ、そもそも皆さん、どこに住んでるの？」

あゆみ「あ・・・」

一同「・・・」

光枝「て、ま、いいか、どこにいても、こうしてつながれるんだし」

一同。

あゆみ「じゃ、また」

洋子「また」

奈美「また」

光枝「また」

瑠衣「・・・また」

と、一人また一人と退出していく彼女たち。

最後に残ったのは、瑞希。

立ち上がり、窓を開ける。

飛び込む喧噪音。

街の灯り。

見上げると――

みんなも、空を見る。

――輝いている星々。

それは、彼女たちにエールを送る先生のように。

また、彼女たちの、未来への希望のように。

――それでも、世界は美しい。

音楽イン。

カーテンコール。

――エンド